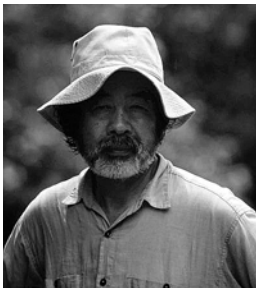
道写協
北海道写真協会
事務局■札幌市中央区大通西3丁目6道新文化事業社内
011・210・5735(直通) 011・207・3939(FAX)
http://www.dosyakyou.org/
第120号

第六十回写真道展にむけて

審査委員長　水越　武



■道展の審査を前に

写真道展の審査の話をいただいき、いつかは調べてみたいと考えていた北海道の写真の歴史に目を通してみました。

北海道(函館)は横浜や長崎などとともに日本でもっとも早く写真が導入され、根付いた所であったことは以前から知っていました。

その中で明治の初期の田本研造の存在に私は本当に驚きました。時間も忘れるほどに田本研造の作品が多く掲載されている「北海道開拓写真」を見続けました。

彼は南国の熊野の生まれで厳しい寒さに対して知識がなかったためか、北海道に来てすぐに重度の凍傷にかかり右脚を切断されています。それでもめげる事なく、未開の地であった北海道が開発されていく様子を丹念に撮影しています。その彼の現実を見る目は冷静で、克明に記録しようという意識に貫かれ、ドキュメンタリーフォトの王道を歩いていたと私は思いました。時代背景を考えると、当時の北海道の写真界は日本の先端を走っていたという印象を持ちました。

その後この伝統は掛川源一郎に受け継がれています。差別をされてきたアイヌの人たちや、貧しい庶民に向けられた温かい眼差しからは、彼の弱い者に対する切ないような愛情が伝わってきます。

こんな先人たちがきらめく伝統が北海道にはあります。その写真界を代表する道展の審査を引き受ける事は身が引き締まる思いです。

さて審査に当たり、私としてはどのような方法でこの伝統を審査に活かすかが問題です。

あまりネガティブに考えないで、今まで半世紀に渡って真剣に追求してきた自分の写真価値観をぶらすことなく、座標軸は変えずに審査をしたいと思います。

社会的なテーマは無論のこと、自然写真においても時代とともに写真は変わって行くものだという考えを持っています。これは私の持論で、今まで何度も主張してきたことです。

良い写真とは撮影意図が明解に伝わって来て、作者のメッセージが写真から読み取れることが必要だと思います。今まであまり光が当てられなかったものに光を当て、それを自分の世界から見て作品にしたものです。他者に委ねることなく、妥協することなく、自分なりの世界にレンズを向けたものです。要約すれば、驚きや発見があり、今まで知らなかった新しい世界を見せてくれる写真です。

最後に少し視点を変えてみます。生物多様性に富み、季節によって激しく移り変わる北海道は、無限の写真のテーマが密かに隠れているにちがいありません。それを一つずつ掘り起こし、白日の下に曝すことになる道展には、今から想像するだけでゾクゾクするような期待を持っています。

略　歴

一九三八年愛知県豊橋市生まれ。東京農業大学林学科中退その後写真を始める。写真集「日本の原生林」で日本写真協会年度賞、「HIMALAYA」で講談社出版文化賞、「森林列島」で土門拳賞、「知床残された原始」で平成二十年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

写真展は国内外で多数開催、作品は東京都写真美術館、フランス国立図書館、イタリア国立トリノ山岳博物館、北海道立釧路芸術館などに収蔵されている。